

# みやもとだより

第7号 平成27年1月発行

季節のおまつり

## お燈祭り

古代から人は太陽や火に畏怖の念を抱き崇めてきた。また靈峰や奇岩怪石などの自然の驚異も神として篤く信仰してきた。それら二つの要素が結びついた祭りが、和歌山県新宮市にある神倉神社のお燈祭りである。

今は熊野速玉大社の摂社になつている神倉神社には、「ことびき岩」というご神体の靈石がある。この巨石は『日本書紀』に天ノ岩盾と記されており、神倉山の山上から熊野灘を見据えている。

毎年二月六日の夕刻、白装束に荒縄を胴に幾重にも巻いた約二千人の上り子と呼ばれる男たちが松明を持ち、熊野速玉大社・阿須賀神社を巡拝して、神倉神社の山上を目指す。歴史を刻む荒々しい五三八段の石段を午後五時位までに登り終え、玉垣内で待機

する。やがて迎え火（神火）を持つ使者から上り子たち全ての松明に火が点されると、介釈と呼ばれる執行役が山上の鳥居の扉（神門）をいつたん閉じる。

山上は火の海と化し、煙がもうもうと立ちこめる様は異様な熱気を帯び、松明は天を焦がさんばかりである。午後八時、神門が開け放たれると松明を持った上り子たちは堰を切ったように急勾配の石段を駆け下りる。新宮節にも「お燈祭りは男のまつり、山は火の滝下り竜」と唄われているように、山上から麓まで荒ぶる火と化した竜が一気に舞い下りるようだ。

約四百年の歴史を持つお燈祭りは、神秘な火を崇拜する原始宗教を見ていくようで、日本で最も古い火祭りの原点ともいえる。男性がご神火を家に持ち帰り、家で待つ女性が神棚に火を点して熊野神の来臨を告げると、熊野の里に春が訪れる。



（写真・文 宮本卯之助）

この国の佳き伝統とともに  
宮本卯之助

